

『坐禅三昧経』における出世間道

田 中 裕 成

0. はじめに

説一切有部の修行道体系が後代に与えた影響は計り知れない。しかし、『俱舎論』の修行道に基づいた解説や、個々の修行階梯に対する卓越した研究は多いが、説一切有部における修行道の総合的な研究は未だ存在しない。

そこで筆者は、そのような研究の第一歩として、四善根位に焦点を当てて『俱舎論』や『雑心論』等に見られる四善根位が《発智論》よりどのように展開してきたかについて検討を行った。その結果、四善根位の取り扱いにいくつかの系統が存在したことを確認できた。このことから有部論書における修行道の研究に際しては、『俱舎論』以外の諸論書をも横断的に検討する必要性が確認された¹⁾。

その中、体系的に修行道が説かれる有部論書は《発智論》以後のものに限られ、数も限られている。そして、それらは戦前から続く俱舎学の研鑽によって、相当に研究されている。このことから、有部修行道に対する研究資料はすでに出尽くしているようにも見える。

しかし、それら有部論書以外に、体系的な修行道を説示する論書として禅経類が存在する。禅経類の中でも特に『坐禅三昧経』や『達摩多羅禅経』等の禅経がアビダルマ的な説示を多く含むことはすでに小玉 [1992] によって示唆されている。さらに、『坐禅三昧経』の修行階梯は有部一般で説示される修行階梯に極めて近似している。にも関わらず、有部修行道の研究の際にこれらの禅経が参照された例を筆者は寡聞にして知らない。

そこで本稿は有部修行道に関する研究の新たな足がかりとして『坐禅三昧経』出世間道の背景を明らかにし、その資料的価値付けを試みることを目的とする。結論を先取りしておけば、『坐禅三昧経』の出世間道は有部修行道の研究に際して有益な資料であると位置づける事が可能であろう。

1. 『坐禅三昧経』の出世間道について

『坐禅三昧経』は羅什が401年に長安着後、初めて僧叡に授けた禅経²⁾、つまりは瑜伽師の禅定マニュアルである。本書は独特な念仏三昧を含む五停心観を含むことから特に念仏や奢摩他の研究者によって重要視されてきた。その中、松涛 [1954・1981, pp. 162-168] は僧叡の序文に基づいて³⁾検討を行い、『坐禅三昧経』の末尾の偈頌を *Saundarananda* に同定した。この発見によって『坐禅三昧経』が瑜伽師の研究においても重要なテキストだということが明らかとなった。

さらに、二十世紀になって出土した梵文瑜伽書に対する井ノ口 [1966] を始めとする研究⁴⁾や、菅野 [1994・1995・2002] の羅什に対する研究⁵⁾によって、羅什訳の禅経類は「何らかのインド禅経」と関係することが解明され、瑜伽行者の研究に際して重要なテキストであることが明らかになっている。それにも関わらず『坐禅三昧経』の研究は、声聞と菩薩の五停心観等に焦点を当てた三昧研究⁶⁾や、観仏論の研究⁷⁾に終始し、声聞の出世間道等の検討は近年になって Yamabe [2003]⁸⁾によって一部触れられるのみである。

このように『坐禅三昧経』下巻の出世間道があまり検討されてこなかったのは、『坐禅三昧経』の下巻が鳩摩羅什の弟子である僧叡によって著されたものとする箕輪 [2002] の研究⁹⁾や、上下巻ともに僧叡の撰述であるとする月輪 [1971, pp. 53-58] の研究¹⁰⁾や、下巻が『大智度論』に基づいて鳩摩羅什自身の理解を述べたものとする池田 [1937]・Tran [2008] の研究¹¹⁾によって、『坐禅三昧経』下巻の中国撰述が有力視されてきたからであろう。

そこで、本稿では『坐禅三昧経』下巻の声聞の出世間道に今一度焦点を当てて、その背景を検討してみたい。この検討は上巻とおなじく『坐禅三昧経』下

卷の記述もなんらかのインド由来の情報に基づいている可能性があることを提示し、有部修行道の研究に資するものとして位置づけることを期待するものである。

2. 『坐禪三昧經』の骨格

『坐禪三昧經』の全体像に関しては今までにも、佐藤 [1928, pp. 267-274] をはじめとして安藤 [1988] や、菅野 [2002]、箕輪 [2003]¹²⁾、Yamabe [2009]、Yamabe・Sueki [2009, pp. xiii-xviii] によって示されている。また、その構造に関しては Tran [2007] を始め、Yamabe [2009]、山部 [2011] によって声聞行の五停心観と菩薩行の五停心観のそれぞれが対応関係にあると指摘されている。

本稿では、まず『坐禪三昧經』の構造を提示したい。鳩摩羅什は上巻にしか品を建てていないものの、その内容に従って区分すれば『坐禪三昧經』のシノプシスは次の通りとなる。(※以下、() で括った内部は『大正新修大蔵經』十五巻中の『坐禪三昧經』の頁番号であり、【 】で記した記述は僧叡の経序¹³⁾に基づく情報である)

上巻 (0269c29)

序偈(0269c29) 【クマーララータの作】

声聞の説示

出家時の問答 (0270c28)

①奢摩他の説示 (五停心観) (0271c02)

[A] 貪欲の対治としての不浄観 (0271c06) 【僧伽羅刹より抜粋】

[B] 瞋恚の対治としての慈心三昧 (0272b01) 【僧伽羅刹より抜粋】

[C] 愚痴の対治としての因縁三昧 (0272c10) 【僧伽羅刹より抜粋】

[D] 尋伺の対治としての数息観 (0273a12) 【諸師の説の混淆】

数息観の六事十六行相 【諸師の説の混淆】

数息観の六覺 【馬鳴の説】 (0273b07)

[E] 等分の対治としての念仏観 (0276a06) 【諸師の説の混淆】

下巻 (0277b14)

②世間道（五神通の獲得を目的とする）(0277b14)

③出世間道（涅槃を目的とする）(0278b27)

1. 世間道と出世間道の選択 (0278b27)

2. 四念住について (0278c03)

3. 四善根について (0279b09)

4. 八忍八智と四沙門果(0280a14)

④独覚（辟支仏）の区分 (0280c24)

⑤菩薩の修習 (0281a22)

菩薩の奢摩他 (0281a22)

念仏三昧 (0281a22) ... [E]

菩薩の不浄観 (0281b26) ... [A]

菩薩の慈三昧 (0282a01) ... [B]

菩薩の因縁観 (0282c11) ... [C]

菩薩の数息観 (0285a06) ... [D]

菩薩の修習の果報 (0285b22)

終わりの偈頌 (0285c01) 【馬鳴の作】

一見したところ、本経の内容は①奢摩他の説示、②世間道、③出世間道、④独覚の区分、⑤菩薩の修習の五つの要素から成っていることが見て取れる。ここでの声聞・独覚・菩薩といった配置に関してはすでに菅野 [2002, p. 82] や山部 [2011, p. 104] によって『修行道地経』や『瑜伽師地論』を想起させると指摘されている。

しかしながら、細部を検討すると、『坐禅三昧経』の構造、つまり、①声聞の奢摩他の説示から始まり、②世間道③出世間道の説示、④独覚の三種類の分類、⑤菩薩の説示といった構造は、『瑜伽師地論』の「声聞地第三瑜伽処」後半部から「独覚地」の構造と近似している様に見られよう。

それに対して『修行道地経』では『坐禅三昧経』の①や②や③をそれぞれ要素として保持するだけで、体系づけて説示はしない。さらにすでに佐藤

[1928, pp. 7-9]¹⁴⁾において指摘されているように『修行道地経』において声聞・独覚・菩薩を組み合わせて説示する第七卷（「弟子三品修行品（二十八）」、「縁覚品（二十九）」、「菩薩品（三十）」）は、後に『三品修行経』に基づいて道安の時代に付加されたと指摘されており、『修行道地経』が本来持っていた内容ではない可能性すらも存在する。

しかし、もし仮に『修行道地経』本来の形が七卷三十品であったとしても、『坐禅三昧経』の構造はすでに中国に伝わっていた『修行道地経』より、『坐禅三昧経』以後の伝来である『瑜伽師地論』に近似していることが窺える。このことから、鳩摩羅什より上巻を授かった僧叡が鳩摩羅什の教学に従い『修行道地経』の構造を参考にして、後に自ら下巻を編纂したとは考え難い。ゆえに、『坐禅三昧経』の下巻は鳩摩羅什が保持していた何らかの「インド編纂の禅定マニュアル」（以下、「原典 X」）に基づいたものと見なせるであろう。

構造の比較

『瑜伽師地論』			『坐禅三昧經』	『修行道地經』
声聞地	第三瑜伽処後半		①奢摩他の説示	分別相品(七)
	第四瑜伽処	前半	②世間道	数息品(二十三)
		後半	③出世間道	
独覚地			④独覚の修習	縁覚品(二十九)
菩薩地			⑤菩薩の修習	菩薩品(三十)

また、それに加え、注目したいのは『坐禅三昧経』と対応するのが『瑜伽師地論』の「声聞地第一瑜伽処」以降ではなく、「声聞地第三瑜伽処」以降であるということである。「声聞地」の構造や成立に関しては Deleanu [2006, pp. 147-153]、デアヌ [2007, pp. 2-3] によって「声聞地第三瑜伽処・第四瑜伽処」が原『声聞地』(Proto-Śrāvakabhūmi) である可能性が指摘されており¹⁵⁾、『坐禅三昧経』の「声聞地」との一致箇所はまさしくこの説と呼応する。つまり『坐禅三昧経』に基づいたであろう「原典 X」は原『声聞地』に近い構造を有していた可能性が窺える。このことは原『声聞地』の存在を主張する Deleanu [2006, pp. 147-153]、デアヌ [2007, pp. 2-3] に対する一つの傍証

となるであろう。

以上の検討の結果、『坐禅三昧経』は、月輪 [1971, pp. 54-56]¹⁶⁾が主張するように上下巻ともに僧叡によって撰述されたものでなく、箕輪 [2002]¹⁷⁾が主張するように本経は上巻と下巻がそれぞれ別の意図をもって編纂されたものでもなく、全体が鳩摩羅什によって一貫した意図で編纂されたものといえよう。つまり、『坐禅三昧経』は原『声聞地』に類する「原典 X」を参照して、それに準じた構造によって製作された可能性が指摘される。そしてその「原典 X」にはその段階ですでに現在我々が目にする『瑜伽師地論』のように声聞の説示の後に簡単な縁覚の説示があった可能性も窺えるのである。

3. 『坐禅三昧経』と『大智度論』の関係について

前章では『坐禅三昧経』の骨格を検討し、『坐禅三昧経』が鳩摩羅什の保持していた「原典 X」に基づいたものである可能性を提示した。しかし、池田 [1937]、Tran [2008] はそれぞれ『坐禅三昧経』下巻の菩薩乗の修行方法に注目し、それと『大智度論』との間に対応が見られることから、鳩摩羅什が『大智度論』に基づいて自身の私案を編纂撰述したものが『坐禅三昧経』下巻であると主張する。

そこで、本章では『坐禅三昧経』出世間道中に見られる『大智度論』との対応箇所について言及したい。この検討は『坐禅三昧経』の下巻の出世間道が『大智度論』に基づく記述であるとの主張を斥けることを目的とする。

『大智度論』と『坐禅三昧経』の間に対応する説示が存在することはすでに池田 [1937]、Tran [2008]、山部他 [2002] によって指摘されている。池田 [1937, pp. 109-118] は『坐禅三昧経』の般舟三昧に関する記述が『大智度論』と対応し、『大乘義章』とも関連することから『大智度論』を基礎として鳩摩羅什の思想を編述したものだと述べる。Tran [2008] は池田 [1937] の主張をうけて『坐禅三昧経』中の五停心観と『大智度論』との対応関係を検討

し、用語用字・比喩・内容と思想に多くの共通点があると指摘したうえで、『坐禅三昧経』は鳩摩羅什が『大智度論』に基づいて撰述した可能性が高いことを指摘した。山部他[2002, pp. 55-59]はSaundaranandaの記述に対応するテキストを対照する際に「相応加行」の箇所に対応する記述として『坐禅三昧経』と『大智度論』が共に対応することを明記する¹⁸⁾。以上が先行研究によって示されている『坐禅三昧経』と『大智度論』の対応関係である。これらはいずれも声聞と菩薩の五停心観に関する説示の箇所であり、世間道・出世間道の説示に関しては言及されていない。

そこで本稿では『坐禅三昧経』出世間道中に見られる『大智度論』との対応箇所について言及したい。『坐禅三昧経』出世間道に説かれる四念住説は、有部一般で用いられる四念住説と比べて独特な形を保持している¹⁹⁾。そして調査の結果この独特な『坐禅三昧経』の四念住説と密接に関係するであろう四念住説が『大智度論』に存在することを発見した²⁰⁾。そしてその際に『坐禅三昧経』に説かれる「楽受はまったく存在しない」との経部的な思想²¹⁾が『大智度論』の身念住中に同様に発見された。

そこで、本章ではこの「楽受はまったく存在しない」という主張に伴われる理証に注目して、『坐禅三昧経』と『大智度論』の関係を吟味したい。

さて、『坐禅三昧経』の「楽受はまったく存在しない」との経部的な思想が『成実論』や『俱舍論』の説示に近似する事はすでにYamabe[2003]によって指摘されている。そこで今回新たに発見された『大智度論』の対応箇所と他の「楽受はまったく存在しない」との説を対照させると次のようになる²²⁾。

「樂受はまったく存在しない」に関する理証²³⁾

	『坐禪三昧経』 [T. 15.278c11]	『大智度論』 [T. 25.199b09]	『成実論』 [T. 32.282b02]	『俱舍論』 (AKBh. 330, 9-19)
A	①因衣食故致樂。樂過則苦生。非實樂故。(278c12-13)		①衣食等物。皆是苦因。非樂因也。何以知之。現見衣食過增。則苦亦增。故名苦因。(282b02-03)	1. 理証①或る飲み物・食べ物・涼しさ・暖かさ等が樂の因であると認められるが、同じそれらが、過度に受容され、不適切な時に受容されると、後の苦しみの因と成る。樂の因が増大すること、あるいは〔樂の因が〕適度であることによって、他の時に苦しみが生じるのは理にかなわない。ゆえに、これら〔飲み物等〕はただ苦の原因であり、樂の〔原因〕ではない。最後にはその苦しみが増大して、はっきりとしたものになるのである。と。(AKBh. 330, 9-15)
B				2. 理証②姿勢を変える場合も同様に説かれるべきである〔すなわち、最後にはその苦しみが増大して、はっきりとしたものになるのである。と〕。(AKBh. 330, 15-16)
C	②如患瘡苦。以藥塗治痛止爲樂。以大苦故謂小苦爲樂。非實樂也。(278c13-15)	④如患疥病向火。揩炙當時小樂大痛轉深。如是小樂亦是病因緣故。有非是實樂。(199b20-22)		3. 理証③なぜなら、いかなる樂も、飢餓や寒熱や、疲労や食欲より生ずる他なる苦に遍れない限り、その限り樂は感受されない。その故に、癒える時に限って無知なる者には樂の知覚がある。樂に対して〔樂の知覚がある〕ではない。(AKBh. 330, 16-18)
D	③復次以故苦爲苦。新苦爲樂。如擔重易肩而以新重爲樂。非實常樂也。(278c15-16)	②復次新苦爲樂故苦爲苦。如初坐時樂久則生苦。初行臥亦樂久亦爲苦。屈申俯仰視胸喘息苦常隨身。從初受胎出生至死無有樂時。(199b15-18)	⑬又人於辛苦中而生樂心。如擔重易肩故知無樂。(282b19-20)	4. 理証④また、愚か者たちには苦が變化する時に樂の知覚が生起する。たとえば荷物を肩より肩に移すような場合〔苦が變化するゆえに樂の知覚が生起する〕。この故に、樂は全く存在しない。(AKBh. 330, 11)
E	④如火性熱無暫冷時。若是實樂不應有不樂。(278c16-17)			
F	⑤若姪欲在內。不應外求女色。外求女色。當知姪苦。若姪是樂不應時樂。若棄不應是樂。(0278c22-24)	③若汝以受姪欲爲樂。姪病重故求外女色。得之愈多患至愈重。(199b19-20)	⑧又女色等皆是乾消病等苦因。故非樂也。(282b12-13)	
			⑨又離欲時皆捨此緣。若實是樂何故捨耶。(282b13-14)	
G	⑥於大苦中以小苦爲樂也。如人應死全命受鞭。以是爲樂。(0278c24-25)	①是身實苦以止大苦故。以小苦爲樂。譬如應死之人得刑罰代命甚大歡喜。罰實爲苦以代死故謂之爲樂。(199b1-15)	④又人爲苦所惱。於異苦中而生樂相。如人畏死以刑罰爲樂。(282b06-07)	
H	⑦欲心熾盛以欲爲樂。老時厭欲。知欲非樂。若實樂相不應生厭。(0278c25-26)			
I	⑧佛言。樂痛應觀苦。苦痛應觀樂。如箭在體。不苦不樂應觀生滅無常。是謂痛念止。(0278c27-29)	⑥如是種種因緣。觀世間樂受是苦。觀苦受如箭。不苦不樂受。觀無常壞敗相。如是則樂受中不生欲著。苦受中不生悲。不苦不樂受中不生愚癡。是名受念住。(200a17-20)	⑭又經中佛說。當觀樂是苦。觀苦如箭入心。不苦不樂當觀無常念生滅。若定有樂不應觀苦。當知凡夫於苦取樂。是故佛說隨。凡夫人生樂相處。汝當觀苦。(282b20-24)	5. 教証②「樂受は苦として見られるべきである」と。(AKBh. 330, 18-19) Cf. 本庄 [2014, pp. 714-715]

この比較検討の結果、次の四点のことが明らかとなる。

第一に『坐禅三昧経』は A.「楽の原因は常に楽の原因ではない」という理証を採用し、「衣や食が過ぎれば苦しになってしまうのと同じ」との喩例を挙げる。この理証と喩例は『成実論』『俱舎論』等に見られるものでありインド由来の記述である。しかしながら『大智度論』ではこの理証と喩例は記述されない²⁴⁾。このことから『坐禅三昧経』の当該記述は『大智度論』に基づいたものではないことが明らかとなる。

第二に D.「苦から苦への変化を楽と錯覚する」という理証において『坐禅三昧経』と『成実論』では「荷物を片方の肩からもう片方の肩へ持ち替えるのと同じ」との喩例を挙げる。この喩例は『俱舎論』や『順正理論』²⁵⁾においても確認され、よく用いられるものである。それに対して『大智度論』では同様の理証を挙げるが「姿勢を変えてもしばらくすると苦しくなるのと同じである、なぜなら身体は生まれてから常に苦を伴っているから」と、他と異なる喩例を挙げる²⁶⁾。このことから D. の『大智度論』の記述は近似する別の原典を参照したのか、あるいは『坐禅三昧経』か『成実論』の記述を参照して鳩摩羅什がわかりやすく言い換えたものと考えられよう。どちらにせよ『坐禅三昧経』は『大智度論』の記述に基づいていない可能性、則ち、『大智度論』は『坐禅三昧経』か『成実論』に基づいて編述された可能性が窺える。

第三に『坐禅三昧経』では C.「苦の対抗策を楽と錯覚する」との理証を挙げ、「皮膚病者が薬を塗るのと同じ」との喩例を挙げる。この理証と喩例は『成実論』に見られないものの『大智度論』において確認される。このことから『成実論』に基づいて『坐禅三昧経』や『大智度論』が成立したのではない可能性が窺える。

第四に第二の点と多少重複するが、D. G. に関しては『坐禅三昧経』『大智度論』『成実論』が同一の理証と喩例を挙げている。しかしながら『坐禅三昧経』と『成実論』の二つは逐語的とまでは言えないが密接に対応しているも『大智度論』のみ大幅な表現の増加が見られる。仮に『大智度論』と『坐禅三昧経』が共に原典がなく、鳩摩羅什の知識に基づいて撰述されたものであれば、『大智度論』と『坐禅三昧経』の表現が相違するのは不可解である。このことか

ら『成実論』と同じく『坐禅三昧経』も『成実論』とよく似た文章を有するなんらかの原典からの翻訳である可能性が窺える。

以上の点を総合すると、少なくとも『坐禅三昧経』下巻の当該箇所は『大智度論』に基づいて著されたのではない可能性が見出される。また、このことから『大智度論』の記述が『坐禅三昧経』と対応する²⁷⁾のは、鳩摩羅什が『大智度論』を訳出する際に『坐禅三昧経』の情報を参照して加味した上で翻訳編纂していたためであるという可能性も窺えよう²⁸⁾。

そしてそうであれば、『坐禅三昧経』の記述が『大智度論』に基づいたものであるとの主張は斥けられるであろう。

4. 結 論

本稿では、『坐禅三昧経』に基づいたであろう情報を調査することによって『坐禅三昧経』中の出世間道の背景を検討した。その結果、次の三点が指摘できる。

- (1) 『坐禅三昧経』の全体の構造は『修行道地経』よりも『瑜伽師地論』の構造に近く、なんらかの「インド編纂の禅定マニュアル」である「原典 X」の構造に従って製作された可能性が指摘される。故に、僧叡によって『坐禅三昧経』下巻が製作されたとは考え難い。

また、『坐禅三昧経』中の声聞の説示に限ってはデレアヌ [2007] が原『声聞地』とする『瑜伽師地論』中の第三第四瑜伽処の構造と呼応する。このような構造の対応は『声聞地』の前段階として原『声聞地』が存在するとするデレアヌ [2007] の仮説を裏付ける一つの傍証ともなるであろう。

- (2) 『坐禅三昧経』では独特な四念住の解釈を行い、その受念住では「楽受はまったく存在しない」との経部的な思想が含有されている。そしてこの独特な四念住の思想は『大智度論』に対応が見出され、『坐禅

三昧經』と同様に『大智度論』にも「樂受はまったく存在しない」との経部的な思想が含有されていることが発見された。

- (3) (2)の発見に基づき、『大智度論』と『坐禪三昧經』の「樂受はまったく存在しない」との思想を比較検討した結果、『坐禪三昧經』の当該の思想は『大智度論』以外に基づいた可能性が窺える。さらに、『大智度論』には一部『坐禪三昧經』を加味したであろう記述も見受けられることから、池田 [1937] や Tran [2008] の主張するような『坐禪三昧經』が『大智度論』に基づいて撰述されたとの理解は斥けられよう。

これらの成果を踏まえるに、『坐禪三昧經』下巻の出世間道が僧叡でもなく、『大智度論』でもなく、「インド編纂の禪定マニュアル」である「原典 X」²⁹⁾に基づいた記述を含有する可能性が示唆されるであろう。だが、どこまでが「原典 X」に基づく記述であり、どこからが鳩摩羅什の私案に基づく記述であるのかに関して、現時点では正確な同定はほぼ不可能である。しかしいずれにせよ『坐禪三昧經』の出世間道が含有しているアビダルマは鳩摩羅什が知り得たものであるので、彼が生きた4世紀頃に流布していたものであることは確実であり、これら『坐禪三昧經』の出世間道に見られる記述は有部修行道の研究に際して貴重な情報を提供するものであろう。

〔付記〕本稿執筆の際にはご多忙の中、松田和信教授、本庄良文教授、並川孝儀教授、清水俊史氏、古角武陸氏より様々な御教示を賜りました。ここに改めて御礼申し上げます。

〔略号表〕

- T. : 大正新修大藏經
 本庄 No. : 本庄 [2014] で用いられる経典ナンバー
 AKBh. : *Abhidharma Kośabhāṣya of Vasubandhu*, ed by P. Pradhan, *Tibetan Sanskrit Works Series*, Vol. VIII, Patna 1967.
 AKVy. : U. Wogihara ed., *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*, 山喜房佛書林, 1971 (復刻版).
 《発智論》 : 『発智論』, 『八犍度論』の総称
 『俱舍論』 : AKBh., 『阿毘達磨俱舍論』 [T1558.29.001a02], 『阿毘達磨俱舍釈論』

[T1559.29.161a04] の総称

- 『発智論』 : 『阿毘達磨發智論』 [T1544.26.918a02]
『八犍度論』 : 『阿毘曇八犍度論』 [T1543.26.771b15]
『心論』 : 『阿毘曇心論』 [T1550.28.809a02]
『心論經』 : 『阿毘曇心論經』 [T1551.28.833b08]
『雜心論』 : 『雜阿毘曇心論』 [T1552.28.869c02]
『甘露味論』 : 『阿毘曇甘露味論』 [T1553.28.966a02]
『順正理論』 : 『阿毘達磨順正理論』 [T1562.29.329a02]
『梁高僧伝』 : 『高僧伝』 [T2059.59.322c02]

Bibliography

[I. 欧文]

- Deleanu [2006] Deleanu, Florin. *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakabhūmi: A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study (2 vols.)*. Tokyo: The International Institute of Buddhist Studies, 2006.
- Demiéville [1954] Demiéville, Paul. “La Yogācārabhūmi de Saṅgharakṣa” *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, XLIV, 2, Paris, 1954, pp.339-436
- Gyana [2001] Gyana, Ratna Thera. *The way of practicing meditation in Theravāda Buddhism*, Sankibo-Busshorin Publishing Co, 2001.
- Lamotte [1970] Lamotte, Étienne. “Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāśāstra). Tome III, Chapitres XXXI-XLII” *Avec une nouvelle introduction*, 1970, LXVIII pp.1119-1733
- Ruegg [1967] Ruegg, D. Seyfort. “On a Yoga Treatise in Sanskrit From Qizil” *In, Journal of the American Oriental Society*, 87, no. 2 : American Oriental Society. pp.157-165
- Schlingloff [1964] Schlingloff, Dieter. “Yogavidhi” *Indo-Iranian Journal*. 7(2, 3): pp. 146-155
- Yamabe [1997] Yamabe, Nobuyoshi. “New Fragments of the Yogalehrbuch” 『九州龍谷短期大学紀要』第43巻, pp.11-39
- Yamabe [2003] Yamabe, Nobuyoshi. “On the School Affiliation of Aśvaghōṣa: ‘Sautrāntika’ or ‘Yogācāra’?” *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 26, No. 2. 2003. pp.225-249
- Yamabe [2009] Yamabe, Nobuyoshi. “The Paths of Śrāvakas and Bodhisattvas in Meditative Practices” *ACTA ASIATICA*, 96, THE TŌHŌ GAKKAI, pp.47-75
- Yamabe・Sueki [2009] Nobuyoshi Yamabe and Fumihiko Sueki. *The sutra on the*

concentration of sitting meditation, Numata Center for Buddhist Translation and Research, 2009.

〔II. 和文〕

- Tran [2007] Tran Thuy Khanh 「『坐禪三昧經』の禪法と思想—『坐禪三昧經』における菩薩の五観法を中心として—」『東海仏教』52号, pp. 202-185
- Tran [2008] Tran Thuy Khanh 「『坐禪三昧經』における菩薩の五観法と『大智度論』との関連について」『印度学仏教学研究』通号114号, pp. 66-70(L)
- 阿部 [2006] 阿部貴子 「入出息念の大乗的展開—『大集經』を中心として—」『智山学報』55号, pp. 113-132
- 安藤 [1988] 安藤嘉則 「中国禪定思想史における羅什訳禪經について」『宗学研究』通号30号, pp. 195-198
- 池田 [1937] 池田英淳 「鳩摩羅什譯出の禪經典と廬山慧遠」『大正大學々報』26号, pp. 101-118
- 井ノ口 [1966] 井ノ口泰淳 「西域出土の梵文瑜伽論集」『龍谷大学論集』通号381号, pp. 2-15(L)
- 印順 [1993] 印順 (述意) 昭慧 (整理) 岩城英規 (翻訳) 『『大智度論』作者とその翻訳』, 正観出版社, 1993.
- 字井 [1944] 字井伯寿 『印度哲学研究』第一卷, 岩波書店, 1994.
- 横超 [1958] 横超慧日 『中国仏教の研究』, 法蔵館, 1958.
- 大南 [1977] 大南龍昇 「五停心観と五門禪」『仏教の実践原理』, pp. 71-90
- 菅野 [1994] 菅野龍清 「大智度論における馬鳴著作の引用について」『印度学仏教学研究』通号86号, pp. 194-197
- 菅野 [1995] 菅野龍清 「大智度論における禪波羅蜜義について」『宗教研究』通号303号, pp. 244-245
- 菅野 [2002] 菅野龍清 「鳩摩羅什訳禪經類について」『仏教学仏教史論集: 佐々木孝憲博士古稀記念論集』, pp. 77-90
- 小谷 [1996] 小谷信千代 「禪經における瑜伽行者—大乗に架橋する者—」『仏教学セミナー』通号63号, pp. 22-34
- 小谷 [2000] 小谷信千代 『法と行の思想としての仏教』, 文栄堂書店
- 加治 [2005] 加治洋一 「有楽説と無楽説との論争」『仏教とジャイナ教: 長崎法潤博士古稀記念論集』, pp. 233-250
- 加藤 [1976] 加藤純章 「楽受に関する論争」『仏教思想論集: 奥田慈応先生喜寿記念』, pp. 897-910
- 加藤 [1999] 加藤純章 『経量部の研究』春秋社, 1999.
- 小玉 [1992] 小玉大円 「瑜伽師と禪經典の研究(I)」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』通号31号, pp. 115-134

- 小玉 [1993] 小玉大円「瑜伽師と禪經典の研究(II)」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』通号32号, pp. 166-179
- 櫻部・小谷 [1999] 櫻部建・小谷信千代『俱舍論の原典解明 賢聖品』法蔵館, 1999.
- 佐藤 [1928] 佐藤泰舜『国訳一切経 經集部四』大東出版社, 1928.
- 周 [2009] 周 柔含『順決択分の研究』, 山喜房仏書林, 2009.
- 武田 [2000] 武田浩学『『大智度論』の著者はやはり龍樹ではなかったのか』『国際仏教学大学院大学研究紀要』第3号, pp. 211-243
- 田中 [1983] 田中教照「有部の四念住について」『印度学仏教学研究』通号62号, pp. 14-18
- 月輪 [1971] 月輪賢隆『仏典の批判的研究』百華苑, 1971.
- デアヌ [2007] デレアヌ・フロリン『『声聞地』の成立とその背景』『東洋の思想と宗教』24号, pp. 1-12
- 中嶋 [1997] 中嶋隆蔵『出三蔵記集序巻訳注』平楽寺書店, 1997.
- 能仁 [2004] 能仁正顕「観仏三昧論」『仏教と人間社会の研究：朝枝善照博士還暦記念論文集』, pp. 595-613
- 袴谷 [2001] 袴谷憲昭『唯識思想論考』大蔵出版, 2001.
- 干潟 [1958] 干潟竜祥「大智度論の作者について」『印度学仏教学研究』通号13号, pp. 1-12
- 平川 [1957] 平川 彰「十住毘婆沙論の著者について」『印度学仏教学研究』通号10号, pp. 176-181
- 平川 [1971] 平川 彰「E・ラモット教授の『大智度論フランス語訳註』第三巻について」『印度学仏教学研究』通号38号, pp. 435-444
- 福田 [1997] 福田 琢「心相应法について」『印度学仏教学研究』通号91号, pp. 107-111
- 古田 [1969] 古田和弘「僧叡の研究(上)」『仏教学セミナー』通号10号, pp. 31-49
- 古田 [1970] 古田和弘「僧叡の研究(下)」『仏教学セミナー』通号11号, pp. 58-74
- 本庄 [1987] 本庄良文「馬鳴詩のなかの経量部説」『印度学仏教学研究』通号71号, pp. 87-92(L)
- 本庄 [2014] 本庄良文『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇 下』大蔵出版, 2014.
- 松田 [1989] 松田慎也「修行道地經の説く安般念について」『印度学仏教学研究』通号74号, pp. 18-23
- 水野 [1930] 水野弘元「譬喩師と成実論」『駒沢大学仏教学会年報』通号1号, pp. 134-156
- 松涛 [1954] 松涛誠廉「瑜伽行派の祖としての馬鳴」『大正大學研究紀要』通号39号, pp. 191-224
- 松涛 [1981] 松涛誠廉『馬鳴端正なる難陀』山喜房仏書林, 1981.
- 襄輪 [2003] 襄輪顕量『『坐禪三昧經』における修行道』『仏教の修行法：阿部慈園博士追悼論集』, pp. 177-196
- 明神 [1993] 明神 洋「禅觀經典における念仏觀」『仏教学』通号35号, pp. 59-79
- 望月 [1932] 望月信亨『望月仏教大辞典』世界聖典刊行協会, 1932.
- 山部 [2011] 山部能宣「大乘仏教の禅定実践」シリーズ大乘仏教第三巻『大乘仏教の実践』,

春秋社, pp. 96-125

山部他 [2002] 山部能宜・藤谷隆之・原田泰教「共同研究 馬鳴の学派所属について—

Saundarananda と『声聞地』の比較研究(1)—」『仏教文化』12号, pp. 1-65

采罽 [2004] 采罽晃「僧叡「関中出禪經序」中の『首楞嚴經』について」『印度学仏教学研究』通号104号, pp. 140-143

渡邊 [1926] 渡邊泰道「修行道地經と法華經との關係に就いて」『宗教研究』1号 四卷, pp. 118-134

註

- 1) 詳細に関しては別稿に譲る。なお、『佛教大学大学院紀要』第44号, 佛教大学大学院, 2016. を予定。
- 2) 『坐禪三昧經』の訳出の背景は『出三藏記集』の「関中出禪經序」[T. 55.0060c17] と、『高僧伝』の「僧叡」の箇所 [T. 50.0364a22] において詳細に記されている。また、この經序を著した僧叡の動向を詳しく分析したものとして 古田 [1969・1970] が存在する。なお、「関中出禪經序」の当該箇所に関しては脚注13を参照。
- 3) 松涛 [1954] は望月 [1932, pp. 1440-1441] の記述に導かれて、僧叡の序文を参照し、本研究を行ったと述べる。
- 4) 二十世紀の半ばにトルファン等で発見された *Yogalehrbuch* 等の構成や行法が鳩摩羅什の他の禪經と構造が似ていることが 井ノ口 [1966] を始め、Ruegg [1967] や、Yamabe [1997]、山部 [2011] によって指摘され、鳩摩羅什撰述の禪經資料の価値が改めて確認されている。
- 5) 松涛 [1954] の結果をうけて菅野 [1994・1995] は鳩摩羅什文献の調査を行い『大智度論』にも *Saundarananda* (canto 8, vv. 32-33, vv. 36-37; canto 17, vv. 42-54) や *Bud-dhacarita* (canto 18, vv. 62-75; canto 23, vv. 17-25;) が引用元を明記せずに混入していることを発見した。次に、菅野 [2002] において『禪法要解』においても同様の *Saundarananda* (canto 14, vv. 24, vv. 26-27, vv. 43) が混入していることが指摘された。さらに菅野 [2002] では『大智度論』や『禪法要解』では *Saundarananda* の同定箇所において出典が明記されていないことや、されたとしても「禪經」とのみ記されることから諸師の禪經を直接参照したのではなく、諸師の禪經をまとめた何らかのテキストを参照して製作したのではないかとの可能性を提示している。
- 6) 松涛 [1954・1981, pp. 162-168] の見解をうけて、瑜伽師を研究する際に『坐禪三昧經』がよく用いられる。たとえば、小玉 [1992・1993] によっては瑜伽師の分析を試みる際に『坐禪三昧經』やその經序が分析され、また、山部他 [2002] では *Saundarananda* が禪經類とどのような関係にあるのか検討する際に『坐禪三昧經』も比較対象として取り上げられる。また、Tran [2007] によって『坐禪三昧經』において菩薩と声聞の五停心觀がそれぞれ対応することが示され、Tran [2008] によって『坐禪三昧經』の菩薩の五停心觀と『大智度論』の五停心觀が対応することが発見された。それと同じくして

Yamabe [2009] や山部 [2011] によっても『坐禪三昧經』が紹介され菩薩と声聞の五停心観がそれぞれ対応することが示された。また、『坐禪三昧經』の五停心観中の数息観に焦点を当てたものとして、大南 [1977] や松田 [1989] や阿部 [2006] 等、多くの研究が存在する。

- 7) 本經は観仏論や念仏論を検討する際によく用いられている。特に重要なものとしては藤堂 [1960]、明神 [1993]、能仁 [2003] が挙げられよう。藤堂 [1960] は『坐禪三昧經』の観仏方法が『思惟略要法』や『五門禪經要用法』の観仏方法と対応すると指摘する。明神 [1993] は『坐禪三昧經』等に見られる五停心観としての念仏観は菩薩行としての観仏ではなく、あくまで声聞行であるとし、それらの成立土壌は有部の弥勒信仰にあったと指摘する。能仁 [2004] は『坐禪三昧經』の記述を根拠に仏像をもとに念仏の観法が整備されたと述べる。
- 8) Yamabe [2003] は本庄 [1987] の指摘に基づき、馬鳴の經部的傾向を広く調査したものであり、『坐禪三昧經』の四念住中の受念住相当箇所において「楽受はまったく存在しない」という經部的な見解を発見した。そしてこのような立場を加藤 [1989, pp. 46-52] がクマーララータの弟子と推測した『成実論』(281c16-282c22)の著者であるハリヴァルマンも取ること、また僧叡の記した經序にクマーララータの名前が確認されること、これら二点より『坐禪三昧經』の当該の説示をクマーララータの禪經からの引用ではないかと推測している。
- 9) 箕輪 [2003] は『坐禪三昧經』の全体的な研究である。そこにおいて氏は下巻が上巻と趣が異なる事に注目し、月輪 [1971 p. 55] の『坐禪三昧經』僧叡撰述説(註10を参照)をうけて、池田 [1937] の下巻鳩摩羅什撰述説(註11を参照)を斥け、下巻僧叡撰述説を展開する。その根拠としては氏が挙げるのは横超 [1958] の「すでに存在していた瞑想法を整理し、階梯的に位置づけるといふ要請が当時有った」との考えと、Gyana [2001] の解説において上座部の観仏として三十二相八十種好の觀察が説かれなことから、この観仏は中国的であるとする二点である。観仏に関しても、『達摩多羅禪經』の頂善根の説示では仏への信を増進するために三十二相八十種好の觀察が説かれており、上座部で説かれなから中国的思想だと断定して斥けるのは些か早計であろう。
また、箕輪 [2003, p. 178 1. 9-12] は下巻においても梵本の存在する可能性を提示するが、この点に関しては一度も吟味せず、最終的に下巻の価値判断を下す際に、「概して後半は鳩摩羅什の見解に基づき、僧叡が三乗に合わせた瞑想法を明らかにした部分とすることができないのではないだろうか」(箕輪 [2003, p. 188])と結論づける。そこで本稿においてもこの結論部分を箕輪 [2003] の理解として受け止める。
- 10) 月輪 [1971, pp. 53-58] は観仏三昧海經を始めとする観念經類を検討する際に鳩摩羅什に係る禪經にも言及している。その際に『出三藏記集』に収められている僧叡の序分と、鳩摩羅什訳出經典の一覽を対照した上で、月輪 [1971, p. 55] は「彼の序を善く見れば、十二因縁も禪法要偈も坐禪三昧經も皆僧叡の撰で、殊に、弘始九年の重校正は坐禪三昧經のことで禪法要のことではないのに、彼れ彼の序をサラサラと見て少ししくじっ

たわけである。」と述べて、僧叡の経序に基づいて『坐禪三昧經』を僧叡の撰述であると決定する。しかしながら、『十二因縁經』（散佚）と『禪法要解』に関しては経序に記されている通りに僧叡の撰述であることは一目瞭然であるが、『坐禪三昧經』に関しては月輪 [1971, p. 55] がどのような理由で『坐禪三昧經』を僧叡の撰述であると断定したのかは不明瞭である。なお、箕輪 [2003, 文末註 2] では月輪 [1971, p. 55] を引いて「月輪氏は本經を僧叡の撰述とみる」とする。

11) 池田 [1937]、Tran [2008] の研究に関しては第三章を参照。

12) 箕輪 [2003] は本来三卷本であった『坐禪三昧經』の中巻と下巻が合併した結果、「上品の辟支仏の説示」が欠落してしまった、と主張する。しかしながら「上品の辟支仏の説示」は以下のように「中品の辟支仏の説示」の後に設けられている。

辟支仏の三種 (280c24) 下品の辟支仏 (280c25) 中品の辟支仏 (281a01) 上品の辟支仏 (281a03)

恐らく上品の辟支仏の説示の後に付加された中品の辟支仏に関するアヴァダーナに注目し、上品が欠落していると理解したのであろう。

13) 『出三蔵記集』に収められた『坐禪三昧經』の経序である「關中出禪經序」は次のとおりである。

『出三蔵記集』[T.55.065a27] Cf.中嶋 [1997 pp. 200-202]

初の四十三偈は是れ究摩羅羅陀法師の造る所、後の二十偈は是れ馬鳴菩薩の造る所なり。其の中の五門は是れ婆須蜜・僧伽羅叉・漚波崛・僧伽斯那・勒比丘・馬鳴・羅陀の禪要の中より、之を抄集し、出せし所なり。六覺（数息観の中の「数」に撰められる六種の禅法）中の偈は、是れ馬鳴菩薩の之を修習するを以て六覺を釋するなり。初めに、姪、悲、癡相、及び其の三門を觀るは、皆、僧伽羅叉の撰ずる所なり。息門の六事、諸論師の説なり。菩薩習禪法の中、後、更に持世經に依りて十二因縁一卷、要解二卷を益し、別時に撰出す。

この序文において、『坐禪三昧經』の上巻「①奢摩他の説示」及び冒頭と末尾の偈に関しては大凡出典が指摘されている。しかしながら、③を含めて下巻の出典に関しては不明である。

また、この経序と類似する説示が『高僧伝』の「僧叡」の項目内においても確認される。『梁高僧伝』[T.50.364a22-a24]

什後至關。因請出禪法要三卷。始是鳩摩羅陀所製。末是馬鳴所説。中間是外國諸聖共造。亦稱菩薩禪。

この『高僧伝』の記述に基づくのであれば内容が全て外国の論師の著作であることとなる。しかし、本記述は『出三蔵記』所収の「關中出禪經序」の記述を基に著された可能性が高く、別の情報に基づいたとは捉えづらひであろう。

いずれにせよ、この僧叡の序文が信頼に足る記述であることは、松涛誠廉 [1954] が馬鳴詩の回収に成功していることより明白である。なお、この経序に基づいた研究としては本経序に登場する人物の分析を試みた小玉 [1992・1993] を始め、箕輪 [2003] の研究や、

本経序が二部構造になっていることを指摘した采翠晃 [2004] が存在する。

- 14) 佐藤 [1928, pp. 7-9] は渡邊 [1926] の研究を受けて次の四点の特徴を挙げて『修行道地経』の第七巻は『三品修行経』であると述べる。

①『道地経』[T.15.230] に対する道安の序分において『修行道地経』が本来は二十七品からなることが記される点。Cf. 『出三蔵記集』[T.55.069b14] 祖述衆經、撰要約行目、其次序以爲一部二十七章。

②『修行道地経』第六卷二十七品の終わりに全体の帰結句と思われる一文が見られる点。Cf. 『修行道地経』[T.15.223b28-c23]

③末尾の三巻にのみ大乘的な要素が多い点。

④『出三蔵記集』に収められた『三品修行経』の箇所出道安による割注で近代の人が『修行道地経』に付属させたと記している点。Cf. 『出三蔵記集』[T.55.009a10] 三品修行經一卷「(割注) 安公云近人合大修行經」

これに対して宇井 [1944, pp. 371-372] は経序の「六万言弱」という点に注目し、『修行道地経』の末尾三品は本来の『修行道地経』にはあったものであるとの理解を示す。また、同様に末尾の三品が『修行道地経』に含まれるとする見解として Demiéville [1954, p. 162] が挙げられる。Demiéville [1954, p. 162] は末尾三品はインドにて『修行道地経』に付随する形で製作されたのではないかとの見解を示す。

また、近年では 宇井 [1944, pp. 371-372] や Demiéville [1954, p. 162] の指摘を受け止めた上で Ruegg [1967] や、小谷 [1996] によって『修行道地経』こそが、小乗仏教から大乘仏教に架橋するテキストとみなせるのではないかとの提起が行われており、『修行道地経』の末尾三品は『修行道地経』に属するものとして捉えられている。

- 15) Deleanu [2006, pp. 147-153] や、デレアヌ [2007, pp. 2-3] は原『声聞地』(「声聞地第三瑜伽処、第四瑜伽処」) とされるテキストが『瑜伽師地論』『声聞地』の成立以前に存在し、その原『声聞地』に法相やヨーガの細かな説明が付加される形で「第一瑜伽処・第二瑜伽処」が増設され、『瑜伽師地論』の現在の構造が成立したと主張する。

- 16) 註9を参照

- 17) 註10を参照

- 18) 山部他 [2002, p. 55 註27] では本箇所の『大智度論』との対応は袴谷 [2001, p. 13] によって発見したと記載している。また、山部他 [2002, pp. 55-59] は『大智度論』と『坐禅三昧経』が対応することを記載するも、それらがいかなる関係にあるかについては言及していない。Cf. 山部他 [2002, pp. 34-35]

- 19) 『坐禅三昧経』[T.15.278c03-279b09] では独特な四念住の説示が見られる。第一に、有部では通常、共相念住では苦諦の四行相、すなわち苦・無常・空・無我が用いられるが、『坐禅三昧経』[T.15.0278c07-c10] では苦・不浄・無常・無我が用いられる。このような傾向は『心論』[T.28.818a19-a23] に対応が見られるが、以後、『心論経』[T.28.848c15-17] 『雑心論』[T.28.909b06-07] を始めとした有部論書では継承しないのでこの点には有部の古説を保持していると考えられよう。第二に、『坐禅三昧経』[T.15.0278c10-

c29] ではYamabe [2003, pp. 234-238] が指摘するように「まったく楽受は存在しない」とする経部的な思想を伴う点である。第三に『坐禅三昧経』[T.15.0278c27-c29] では受念住の観察は經典の通りにするとし、『俱舍論』(AKBh. 330, 18-19) 等で「楽受はまったく存在しない」とする際の教証で締める点が特徴的である(なお、本經典はAKUp. に引かれるものであり、本庄 [2014, pp. 714-715] (本庄No[6012]) も参照)。第四に『坐禅三昧経』[T.15.0279a16-b09] では総相念住において、有部で一般的な苦諦の四行相ではなく、「一切に楽は存在しない」ということを観察する。これは受念住における「楽受はまったく存在しない」という立場に准ずるものであり、受念住のみが独立したものではなく、これら四念住説が一貫性を持ったものであると推察されよう。以上四点が『坐禅三昧経』四念住説における独特な特徴である。

また、四念住説を始めとする『坐禅三昧経』における出世間道の特徴の詳細に関しては別稿を予定している。

- 20) 当該箇所は『大智度論』[T.25.198c10-202b22]。また、この点に関して Lamotte [1970, pp. 1150-1176] は「楽受はまったく存在しない」という経部的思想や、『坐禅三昧経』や『成実論』等との対応について一切触れていない。また Lamotte [1970, pp. 1119-1137] では三十七菩提分法の翻訳に先立ち、複数のテキストを用いて經典や、毘婆沙師、大乘、夫々の立場を紹介するが、その際にも当該箇所の四念住の独自性について言及しない。また、『大智度論』の四念住説をも検討した田中 [1983] によっても当該箇所の紹介や検討は行われていない。当該箇所の対応を図示すると次の通りである。

『大智度論』と『坐禅三昧経』の四念住説の対応

『大智度論』 [T.25.198c10-202b22]	『坐禅三昧経』 [T.15.278c03-279b09]
四念住概説 [T.25.0198c10-c20]	—
四念住 [T.25.0198c10-c12]	四念住概説 [T.15.278c03-c06]
四顛倒 [T.25.0198c14-c20]	
五種不浄 [T.25.198c20-199a28]	—
身念住 [T.25.199a28-c04]	—
身念住概説 [T.25.199a28-b09]	—
楽受の非実在① [T.25.199b09-b24]	楽受の非実在論 [T.15.278c12-c29]
身念住の四行相 [T.25.199b24-c04]	身念住の四行相 [T.15.278c06-c10]
受念住 [T.25.199c04-200a20]	—
楽受の非実在② [T.25.199c04-c14]	—
楽受の非実在③ [T.25.199c14-c22]	—
無漏の楽受について [T.25.199c22-200a16]	—
受念住まとめ [T.25.200a16-a20]	Cf. 『成実論』 [T. 32.283c20-284a2]
心念住 [T.25.200a20-b26]	受念住まとめ [T.15.278c27-c29]
楽受を感じる心の非実在 [T.25.200a20-b11]	—
有為法の無常 [T.25.200b11-b19]	—

心念住まとめ [T.25.200b19-b26]	心念住 [T.15.278c29-279a12]
法念住 [T.25.200b26-c29]	—
我は存在しない [T.25.200b26-c27]	—
法念住まとめ [T.25.200c27-c29]	法念住 [T.15.279a12-279a23]
—	総相念住 [T.15.279a23-b09]
四念住附論 [T.25.200c29-202b22]	—

『大智度論』と『坐禅三昧経』の記述は完全に対応するわけではない。しかしながら、『坐禅三昧経』中の四念住説の特徴（詳細は脚注19を参照）、①身念住を不浄・無常・苦・無我の四行相から観察する。②「まったく楽受は存在しない」という立場をとる。という二つの点に関しては概ね合致し、さらに、③受念住の観察では仏説の通りに楽受を苦と、苦受を楽と、不苦不楽受を無常と観察するとする。という点に関しては合致するとまでは言えないものの、近似する傾向が認められる。また、身念住や法念住に関しても同質の要素が多く認められる。このことから『大智度論』と『坐禅三昧経』の四念住説は密接な関係にあると言える。

なお、今回の検討の趣旨とは異なるので取り扱わなかったが、『大智度論』では『坐禅三昧経』の「楽受は全く存在しない」ことに対する理証は身念住にのみ見られ、次の受念住以後の理証や論証に関しては対応が見られなかった。『大智度論』の当該箇所は今後「まったく楽受は存在しない」という経部的思想を吟味する際に貴重な情報を多く含んでいるといえよう。

- 21) 『坐禅三昧経』に「楽受はまったく存在しない」との経部的な思想が有ることは Yamabe [2003, pp. 234-238] によってすでに指摘されている。またこの、「楽受はまったく存在しない」という経部的な思想に関しては、水野 [1930] は取り上げなかったものの、加藤 [1976・1999] によって経部師であるシュリーラータやクマララータの思想的特徴であることが明らかとされ、本庄 [1987] によって馬鳴も「楽受はまったく存在しない」とする立場をとることから経部師である可能性が提示されている。また、本庄 [1987] の記述を受けた Yamabe [2003] が馬鳴を中心として「楽受はまったく存在しない」との思想の追跡調査を行っている。また、加治 [2005] によって当該箇所の『順正理論』の翻訳研究が行われ、デアヌ [2007] は Yamabe [2003] が見つけることができなかった『声聞地』内における「楽受はまったく存在しない」との思想に関連する記述を指摘している。
- 22) 今回の対照作業においては『坐禅三昧経』と『大智度論』の関係を明らかとすることに主点に置くものであり、「楽受はまったく存在しない」との経部的思想の解明を目的としたものではないので、本庄 [1987] によって指摘されている *Buddhacarita* の該当箇所や、加藤 [1976・1999] や、加治 [2005] によって指摘されている『順正理論』の当該箇所や、Yamabe [2003, pp. 236 註35] によって指摘されている *Pratītyasamutpādayākhyā* の対応箇所や、デアヌ [2007] によって指摘されている『瑜伽師地論（第四瑜伽処）』の関連箇所の記述との関係については対照表にも加えず、検討を行わなかった。

23) 『大智度論』の当該箇所、及び『坐禅三昧経』や、『俱舍論』で用いられる理証は全て提示した。しかし『成実論』においては二十六の理証が挙げられる。これを全て列挙すると煩雑になるので、ここでは対応しなかった『成実論』に限られる理証については省略した。また、漢訳文献を引用する際に冒頭に付記した番号は当該文献内での記述順序である。

なお、『俱舍論』を翻訳する際には 櫻部・小谷 [1999, pp. 32] を参照した。また、(AKBh. 330, 18)は AKVy. 等に従って修正した。

※ AKVy. [518, 22]. *sukhā vedanā*-. Pradhan [330, 11]. *duḥkhā vedanā*-. Cf. 櫻部・小谷 [1999, pp. 32 註2] は AKVy. のみを挙げるが蔵訳や、真諦訳、玄装訳も AKVy. を支持する。

24) 『大智度論』[T.25.198c10-202b22] の中で対応表に記載していない他の念住において記述される理証や喩例においても確認されなかった。

25) 『順正理論』[T.29.663a21-a25] 又於衆苦易脱位中。世間有情樂覺生故。依如是義故。有頌言「如擔重易肩 及疲勞止息 世間由此苦 脱彼苦亦然」故愚夫類於辛苦中有樂覺生。實無有樂。Cf. 加治 [2005, p. 236]

26) この喩例は字面だけを見ると、A. の理証を別の喩例を用いて説明する『俱舍論』の B. の喩例に近似する。しかしながらこの B. の喩例は A. の理証に対する別の喩例である。そのために『大智度論』の D. の理証に対する喩例と同一の喩例とは考え難いであろう。

27) 『大智度論』と対応する『坐禅三昧経』出世間道の記述として、四念住の説示の他、九種不還説等が近似した形で見られた。詳細は別稿を予定している。

28) 『大智度論』の作者に関しては多くの研究があるが、主な説を挙げると次の五説であろう。①平川 [1957] による『大智度論』と『十住毘婆沙論』は別の作者だとする説。②干潟 [1958] による龍樹からの翻訳と鳩摩羅什の加筆の合作であるとする説。③ Lamotte [1970] による四世紀の龍樹が著したとする説 (Cf. 平川 [1970])。④印順 [1993] による『中論頌』の作者である龍樹が著したとする説。⑤加藤 [1996] による鳩摩羅什が『大智度論』の作者であるとする説。以上の五種の説が存在する。また、近年では武田 [2000] による主張もある。

今回の検討によって『大智度論』の身念住に含まれる「樂受はまったく存在しない」との記述が『坐禅三昧経』の影響下にあった可能性が浮かび上がった。

そして『大智度論』は『出三蔵記集』に収められている「大智論記」(『出三蔵記集』[T.55.075b10-b13] Cf. 中嶋 [1997, pp. 296-297]) に基づけば、弘始四年 (402年) の夏から翻訳が始まり、弘始七年 (405年) の12月に完了したこととなっている。

さらに『坐禅三昧経』も『出三蔵記集』(『出三蔵記集』[T.55.065a19-b21] Cf. 中嶋 [1997, pp. 200-203]) に基づけば弘始三年 (401年) の12月頃に授かり、弘始九年 (407年) に重校正が行われたこととなっている。故に『坐禅三昧経』は『大智度論』以前の訳出であり、『大智度論』を翻訳編纂する際に参照することは十分に可能であった。

このことから『大智度論』の訳出の際にすでに訳出済みの『坐禅三昧経』に基づいて鳩摩羅什の加筆が編纂が有った可能性が窺える。そしてそうであれば、少なくとも『中論

頌』の作者である龍樹が『大智度論』を全て著したとする④印順 [1993] の説は斥けられるであろう。しかし他の説に関しては本稿の検討内容からは特に積極的な意見を提示することはできない。

- 29) 菅野 [1994・1995・2002] によっても鳩摩羅什が「禪經の綱要書」のような「原典 X」を保持していた可能性が提示されているが、菅野 [1994・1995・2002] が提示する「原典 X」と本稿が提示する「原典 X」がどのような関係にあるかについては検討を行わなかった。